

北斗句会（6月）選句

宮下ひかる選

特選

NO. 27 年寄りとみてあなどる蚊耳のきわ

これは、作者の思い。蚊は若い血がおいしい筈。この思いが生生しく共感できて、詠み手は苦笑い千万なり。

選

NO. 2 神楽坂路地を巡れば青簾

想い募るあの娘に会いに来たのか、これからか、路地にきて心躍る、心の動きと現場の風景のマッチが巧み。

NO. 25 大拙の墓碑に動かぬ青蛙

青蛙には知らぬが仏、作者には大変に気がかり、追い払うかしかし、待て、鈴木大拙さんに悪いし、心の逡巡が面白い。

NO. 14 石仏の鼻にのつかる蟬の殻

青蛙と言え仏を敬い、一生を捧げ、そこに留まると見てそれに惹かれ、意識し句にした作者に敬意。

NO. 28 青鷺の三步やまたも動かざる

印象的な風景をよく捕まえ、微妙なまでに描写。三步また動かざる、とはすばらしい描写、体験的事実。

大崎石州 選

特選

NO. 8 大拙の墓碑に動かぬ青蛙

北鎌倉東慶寺にお参りしたときのことだろうか、近代日本最大の仏教学者と云われる鈴木大拙の墓に青蛙がとりついている。

選

NO. 22 緋牡丹や音ならぬ世を知らぬげに

コロナ禍で混迷をする巷を知らぬげに見事に咲いた緋牡丹が目に浮かぶ。「音」はちと凝りすぎ、仮名で「ただ」ではどうか・。

NO. 31 煮立てよき青あざやかに青山椒

色と匂いがあり、秀逸！

NO. 41 白雲の影を散らすや青田風

中七の「影を散らすや」との着眼が面白い。

NO. 42 田植えする棚田を覗く富士の山

富士山が覗くのはいただけない。「を覗く」を「見守る」が良いのではないか・。

長池豆陽選

特選

No.10 走り梅雨懇意な歯科医転居せり

歯科治療の医師との相性は大切、その歯科医が転居、残念さとやり直しのもどかしさの心理が良く出ている。梅雨入り前のもどかしい雰囲気の様子が効いている。

選

No. 6 白樺の幹の明るき夏の雨

“狐の嫁入り”ともいわれる天気雨は夏の雨の特徴の一つ。それを白樺の幹の明るさで言い表した措辞が上手い。

No.31 煮立てよき青あざやかに青山椒

佃煮類は灰汁の抜き方が重要で、火加減がポイント。“煮立て良き”は全ての工程が上手くいった証。色も香も素晴らしい青山椒が見えてくる。

No.32 悪事なすやうに傘寿のサングラス

濃色のサングラスは、それだけで抵抗感を与えやすい。まして着用者が高齢者なら人物の素性まで勘ぐりたくなる。諧味十分。

No.42 田植えする棚田を覗く富士の山

棚田は急こう配地に位置し形も小さい。それを覗くように富士が映るとなると場所は制限され、しかもそれを見ている作者がいる。場所は何処だろうか、興をそそられる。

吉岡誠山選

特選

NO. 2 3 悪事なすやうに傘寿のサングラス

サングラスを掛けるとやくざぽくなるという感覚を未だに持っている 80 台の人間にとって、サングラスをかけるのわ一大決心が必要である。その時代感覚が懐かしい。サングラスをして満足している作者の姿が目につかぶ。

選

NO. 7 妻伏して悟る卵の花腐しかな

妻が病気になって、初めて教えられることが多い。勿論子供が病気で倒れても同じことであろう。

NO. 1 4 石仏の鼻に乗っかる蟬の殻

蟬がああ石仏の鼻の上で脱皮したのが不思議である。
わざわざ鼻の上を選んだのだろうか。

NO. 2 4 草取やむすび頬張る爪の泥

草取りに頑張って、爪の泥も気にならなくなる。その集中力が素晴らしい。
後で考え、噴出したことであろう。

NO. 2 7 年寄りとみてあなどる蚊耳のきわ

蚊の些細なことを、年寄りとあなごられたひがみを持つ。ある意味で、人間は恐ろしい。

山縣秀雄選

特選

- NO. 41 白雲の影を散らすや青田風
吹き渡る青田風が、「影を散らす」は上手な表現である。景が大きくて良い。

選

- NO. 7 妻臥して悟る卯の花腐しかな
臥した妻の有難さが季語で余計に強調されており、「悟る」の動詞が効いている。
- NO. 13 雨蛙腹を見せてるガラス窓
以前見た光景でガラスの視点が良い。雨蛙への作者の観察眼が素晴らしい。
- NO. 29 風呂掃除しつこき黴の憎さかな
作者の生活実感がそのまま句意に表現されており良い。作者の気持ちがよく分かる。
- NO. 32 悪事なすやうに傘寿のサングラス
老人に対する「悪事なすやうに」がユーモアがあって良い。このご時世マスクとサングラスは必需品か

田中資凡選

特選

- NO. 7 妻臥して悟る卯の花腐しかな
病床の妻への作者の心情が、悟る卯の花腐しかななどの措辞により、重たく伝わる。ことに、悟るとの一語が、強く叙情の拡がりをもたらしている。

選

- NO. 4 青鷺の身じろぎもせぬ水辺かな
青鷺のいる森閑とした湖沼の情景が見える。中七、下五の措辞が巧みで、水辺にあって、景を楽しむ作者がそこにいるのが伺える。
- NO. 22 緋牡丹や菑ならぬ世をしらぬげに
中七、下五の措辞が巧み。コロナ禍の菑ならぬ世にある人間界に比し無縁の自然界にある緋牡丹の美を愛でているのだ。
- NO. 27 年寄りとみてあなどる蚊耳のきわ
耳のきばに近づき煩い蚊を、年寄りとみてあなどっているという表現の面白さ、偕味があってよい。
- NO. 32 悪事なすやうに傘寿のサングラス
傘寿の初夏、サングラスする己が姿を、さらりと悪事なすようにと言う。サングラスには不思議な効用が潜んでいるのだ。

大森康正選

特選

NO. 32 悪事なすやうに傘寿のサングラス

サングラスには人に陰影を作る魔力がある。人目を気にして、こそこそ行動「悪事をなすよう」で表現できた。諧味あり。

選

NO. 20 緑陰や陣取りしたる石の椅子

思い出の場に立って思い出が蘇った。幼友達の顔や声、懐かしさと同時の寂しさ。心境が伝わってくる。

NO. 30 清流に揺らぐ梅花藻青しぐれ

清々しく美しい光景を、そのまま素直に詠った。一雨降っても濁らない自然環境「青しぐれ」が全体の鮮度を深めた。

NO. 41 白雲の影を散らすや青田風

色彩感あり。青田波による「影を散らす」の措辞が良い。

NO. 42 田植えする棚田を覗く富士の山

田植えの途中、畔での休憩時の発見だろうか。棚田だからこそその景色。「棚田を覗く」が良い。

太田黒幸風 選

特選

NO、8 大拙の墓碑に動かぬ青蛙

大拙の堂々とした墓碑に小さな青蛙が対照的で墓碑を一層大きくするとともに諧味がある。

選

NO、2 神楽坂路地を巡れば青簾

料亭の並ぶ昔の家並みの様子がすがすがしく詠まれている。

NO 5 きらりきらり実梅のこぼす雨雫

実梅のふっくらとしてきらりきらりと一層奇麗に輝やいている様が目に浮かぶ。

NO、25 潮来にはむらさき濃き菖蒲園

潮来は菖蒲の名所であるが濃ゆい紫色が一層菖蒲園を浮き立たせている。

NO、28 青鷺の三步やまたも動かざる

青鷺はじっと水面下の魚を探しているが、その動きを上手くとらえている。

森田光彦選

特選

NO. 20 緑蔭や陣取りしたる石の椅子

涼しさが伝わってくる句。「陣取りしたる」の措辞が良い。

選

NO. 8 大拙の墓碑に動かぬ青蛙

大拙は知る人ぞ知る。墓碑に青蛙を見つけた作者の驚きが伝わってきます。

NO. 13 雨蛙腹を見せてるガラス窓

状況がよくわかる。「ガラス」→「硝子」に。

NO. 19 白雨来て五重の塔の消えにけり

夕立が来て、自分が濡れることよりも、五重の塔が見えなくなったことに驚いている作者の詩情が素晴らしいです。

NO. 28 青鷺の三步やまたも動かざる

青鷺の生態がよく観察され、見事に句に生かされています。

藤田紀潮選

特選

NO. 28 青鷺の三步やまたも動かざる

獲物の魚を狙う青鷺の生態を見事に活写した句。十七音の真中のや切れで、動と静の対比の妙。韻律も好調。

選

NO. 7 妻臥して悟る卯の花腐しかな

病床の妻は季節の変化や外の天候模様に、殊のほか鋭敏。今日の雨を「卯の花腐し」とさどっている。切ない。上五は「臥す妻の」では？

NO. 24 草取やむすび頬張る爪の泥

三段切れだが、「爪の泥」がリアリティに富む。普通、おむすびは俳句の主役となるが、この句では脇役か。

NO. 32 悪事なすやうに傘寿のサングラス

「悪事なすやうに」がユニーク、傘寿に諧味。卒寿では悪事もサングラスも少ないが今や人生100歳時代。はてさて、卒寿のサングラスもあるのだろうか。

NO. 41 白雲の影を散らすや青田風

や切れと擬人法に伴う問題があるが、青田に映じていた一朵の白雲が、風によってその影が散ってしまったとの句意は理解出来る。

竹内雲泉選

特選

NO. 31 煮立てよき青あざやかに青山椒

佃煮を作るところでしょうか？ふつふつと山椒を煮詰めている様子が良く詠まれています。「青」が句の律を引き締めて良いです。

選

NO. 7 妻臥して悟る卯の花腐しかな

この歳の頃、奥様の存在は大きい。奥様の病で、日常些事にやる気を無くして気落ちしている様子が良く表れていて感心しました。

NO. 9 待つことはうれし胡瓜の咲き初むる

初夏、実のなる野菜（南瓜・茄子・胡瓜など）の花が咲き始めるのは、待ち遠しいものです。気持ちを素直に詠んでいて気に入りました。

NO. 28 青鷺の三歩やまたも動かざる

私も「サンクチャリア」で青鷺をよく観ます。ときどき、立ち位置を変えますが、じっとして動かない「青鷺」の様を上手く表現している。

NO. 36 灰汁強き若き苺の火の加減

苺ジャムでも作るところでしょうか。まだ青味のある初苺は、灰汁が有ります。灰汁取りと火の加減は、難しい。「若き苺」を好く詠んでいます。